

『我が儘な皇太子は恋着する』

著：剛しいら

ill：周防佑未

耐えることが美德だというのは、間違った考えだっただろうか。

チャベスは毎日ひたすら耐えた。夜と朝、トイレで自分の下半身を慰(なぐさ)め、間違っても王子に手を出したりしないように、細心の注意を払って耐え続けたのだ。

けれど同居が一カ月も過ぎた頃、チャベスは王子の思わぬ逆襲に遭(あ)った。

王子はどこで知り合ったのか、派手な感じの美少女や、変わったファッションの青年達と、危ない雰囲気(きふいき)のクラブやバーに出掛けるようになってしまったのだ。

そしてついにその夜、恐ろしい宣告をされてしまった。

「今夜は……ガードしなくていい。新しい友人と出かける」

お気に入りのデザイナーズブランドの服を着て、コロンまで振りかけた王子に言われて、チャベスは固まる。

「殿下、正気のご発言ですか？ ご自分の立場を分かっているらっしゃると思っておりましたが」

「パリでは誰でも自由だ。それに私の新しい友人達は、ガライ王国なんて知らないし、私が皇太子であることも知らないんだ」

「だからといって……殿下、ここ数日の行いは、あまり褒(ほ)められるべきことではありません。ああいった場所では、ドラッグの売買が盛んですし」

「そうだな……だかドラッグに興味はない。心配するな」

王子は鏡に自分の姿を映し、美しく見える角度で何度も確認している。

確かに危ないほど美しい。ちょっとでも隙を見せたら、このままでは誰もが王子に対して発情(はつせい)してしまうのは明らかだった。

「心配しているのは、それだけではありません……。殿下、誘惑(ゆうわく)されてはいけません。殿下はいずれ結婚し、次代の王となる世継ぎを作る大切なお体です。もしここで、おかしな病にでも罹(かか)ったら、すべてが……」

「チャベス、私だって健康な若い男なんだぞ。いろいろと楽しみたい気持ちもあるし、性欲(せいよく)だってある」

「い、いけません。それは国民を裏切る行為です」

大げさなと笑われるのを覚悟(かくご)で言った。けれど王子は笑わなかった。むしろ哀(あ)しげな目で、チャベスを見返(みかへ)しただけだ。

「だったらどうすればいい？」

潤(うる)んだ瞳(ひとみ)の王子に言われて、チャベスは返事に詰(詰)まる。

そこまで王子が、自分の性欲(せいよく)で苦しんでいるなんて、思いもしなかった。いや、チャベスは自分の性欲(せいよく)に翻(ほん)弄(ろう)されて、王子の正しい姿(すがた)を見ることが出来(でき)なかったのかもしれない。

「殿下……なざりたいのは……恋愛(れんあい)ですか？ それともただ性欲(せいよく)を満た(みた)したいだけですか？」

チャベスの問いかけに、王子はますます哀(あ)しい顔(かほ)になっていく。

「この私には、恋愛の自由なんてない。そんなことチャベスだったら知ってるだろ。恋愛感情よりも必要なのは、健康な精子それだけだ」

「……殿下……」

「世継ぎを作れるだけの、健康な精子があれば何の問題もない。そうなんだろう、チャベス。それに万が一、私に何かあっても心配ない。弟のイーシュガラムが、しっかりと後を継いでくれるだろうから」

そのまま王子は出て行こうとする。チャベスは思わずその前に立ち塞(ふさ)がってしまった。

「行ってはなりません、殿下。性欲のために、道を踏み外してはいけません」

「何でチャベスがそこまで言うんだ。何の権利があって、邪魔をする」

「……」

答えはもう分かっている。

チャベスは嫉妬で気が狂いそうになっていたのだ。

どうして王子は、こんなにもチャベスを苦しめながら、あっさり知り合ったばかりの相手とそんなことをしようとするのだろうか。最初からチャベスのことなど見ていないというなら、眠る時に腕を貸せなどと言わなければいい。

毎夜のように腕を貸した。腕が王子の頭で動きを封じられることで、どうにかチャベスは救われていたのだ。

なのに王子は、もうその腕すらいらないと言うのだろうか。

「殿下……私がお相手致します。苦しみを軽くして差し上げますから、どうか……あのような危ない友人と、不健全な場所に出掛けることは思い止まってください」

王子の警護という役目を、解雇される覚悟で口にした。

今すぐ帰国しろと言われても、チャベスには何も言い返せない。

チャベスが口にしたのは、ガライ王国では未だに存在している、王室不敬罪そのものだった。

「ふーん、そうか、そこまでやる覚悟がチャベスにはあるのか」

なぜだろう、王子の全身から、その時喜びのオーラが立ち上ったような気がした。

王子はチャベスに近づいてきて、ネクタイを引っ張る。その顔には、満面の笑みが浮かんでいた。

「もしばれたら、チャベス家の名誉は剥(はく)奪(だつ)され、刑務所行きになるかもしれない。それでもそんなことが言えるのか」

「覚悟は出来ております……。殿下のことは、ずっとお慕(した)いしておりました……。ですが、このようなことをしてはいけないというのは、十分に分かっていたつもりです」

なのに言ってしまった。

王子の本当の価値も知らないあんな若者達に、チャベスにとってこの世界一愛しい美しい肉体を、好きにさせるわけにはいかなかったのだ。

「チャベス……では、命じる……。私の体を楽にしろ。性欲から解放して、自由にしてくれ」

チャベスは静かに頷く。すると王子はネクタイを引っ張って、自らチャベスの顔を自分に引き寄せ、唇を重ねてきた。

「誓(せい)約(やく)の印だ……」

キスは甘く、いかにも秘密の味がした。

「もう出掛けないと、約束して頂けますか？」

王子にネクタイを掴まれたまま、チャベスは不安そうに訊く。

「ああ……満足させてくれたらな」

いつの間にか王子の目は、とろんとした感じになっている。こんな表情はチャベスも初めて見るもので、見ているだけで心臓が高鳴りだし、自制心が吹っ飛んだ。

それと同時に、荒々しく王子の着ているものを脱がし始めていた。

誰に見せるために、こんな服を選んだのだと腹が立つ。チャベスだったら、王子がどんな姿だって愛しく思えるのに、服で判断するような人間のために着飾るのか。そんなことはチャベスには許し難い。

上着を脱がしながら、王子の体をベッドへと移動させていく。そして乱暴に王子をベッドに押し倒すと、靴を取り去り、柔らかな生地の子細身のパンツを、ぐっと引き抜くようにして脱がしていた。

「怒ってるのか、チャベス。ずいぶんと乱暴じゃないか」

王子が抗議しても、チャベスにはもう謝る余裕もなかった。けれどさすがにこれでは乱暴すぎると、反省もしていた。

「申し訳なかったです……」

上のシャツは丁寧に脱がせた。さらにビキニブリーフを見た瞬間、チャベスは思わず顔を背けていた。

直視してはいけないものがそこにある。その昔は王族の素顔を直視することすら禁じられていたという。今は簡単に映像や写真で誰でも王族の姿を見られるようになってしまったが、今でも年寄りも決して王族の前では顔をあげない。

同じようにその部分だって、本来なら決して見てはいけないものだろう。

「一人で裸になるのは嫌だ。チャベスも脱げ」

命ずる王子の声も上ずっている。

今回はすぐに従った。いつもは隠していた股間にあるものの状態を、王子にも正しく知って貰(もら)いたかったのだ。

すべて脱ぎ捨てたチャベスは、そこでしっかりと目を閉じた。

「殿下、ご安心ください。殿下がどんな顔をなさろうと、決して見ないと約束します」

そのまま手探りでチャベスはベッドに這い上がり、王子の体をそっと抱き寄せた。

本文 p70～77 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>